

小平桂一氏ロングインタビュー

第1回：少年時代～高校時代



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

今月より、小平桂一氏のインタビューを連載いたします。小平氏は恒星物理学や銀河物理学で大きな業績をあげ、特に銀河形状の定量解析により銀河構造の研究に新たな道を切り開きました。また、大型光学赤外線望遠鏡計画（すばる望遠鏡）に関してその構想の初期段階からコミュニティをリードし、国立天文台長として建設プロジェクトを推進するなど、日本の天文学の発展にも大きく貢献しました。今回は戦中戦後という大変な社会状況の中で天文学に出会い、天文学者を志していく少年時代から高校時代までのお話です。

小平桂一氏略歴

1937 東京都生まれ

1959 東京大学理学部物理学卒業

1964 キール大学（ドイツ）理学博士
東京大学東京天文台助手

1971 東京大学理学部助教授

1982 東京大学東京天文台教授・
理学部教授（併任）

1988 国立天文台教授・東京大学教授（併任）

1994 国立天文台長（～2000）

2001 総合研究大学院大学学長（～2008）

2008 日本学術振興会ボン研究連絡センター長
（～2018）

●幼少の頃

高橋：インタビューをお引き受けいただきどうもありがとうございます。ではまずお生まれの頃から聞きたいと思います。お生まれが昭和12年の2月、これは早生まれということですね。

小平：2月20日、早生まれですね。

高橋：東京でお生まれということで。

小平：生まれたのは東京なんですけども、3か月



小平桂一氏近影（小平氏より提供）

くらいで関西に行っちゃったんです。父親の仕事の関係だと思いますけど。

高橋：では育ったのは？

小平: 小学校のねえ, 4, 5年まで大阪. 戦争が終わって, 2年目くらいまで大阪にいたのかな.

高橋: じゃあ東京の記憶は全くないわけですね. お父様はどういったお仕事?

小平: 父はねえ, 当時, 大日本セルロイドっていう会社があって, まあ軍事産業の一種かもしれません. セルロイドですからね. そこで事務系だったと思うんですけどねえ. それで東京からまず兵庫県の明石かなあ. 僕が物心ついてから知ってるのは, 大阪の堺市にある大きな工場に職場があって, その関係で大阪市内に住んでたんですけど, 戦争が激しくなって疎開したりしました.

高橋: じゃあ物心つく頃にはもう戦争が始まった感じですか? 4歳の時に太平洋戦争が始まるわけですね.

小平: うーん, 子供の頃でうろ覚えなのが, なんか提灯行列があってですね. 人の肩車かなんかに乗って見に行ったのが, どうもフィリピン陥落の, たぶん太平洋戦争の初期の頃の日本が優勢だった頃のなんかじゃないかと思います.

高橋: お祝いということですか?

小平: お祝いの, うん. みんな提灯持って, 夜, こうぞろぞろ歩いて見に行ったのがうろ覚えで.

高橋: じゃあ幼稚園は大阪で?

小平: あの頃は戦争で子供は産めよ増やせよで, うちの4人兄弟だったんです. それで英才教育っていうか, まあ今は科学技術とかいうけど, 当時は戦時でお国のためになるのを育てるとかいうんで, なんかIQテストっていうのがあってですね. 知能指数かなにかしら, まあ広範囲の子供に受けさせて, それである程度点が良ければプロモートするような, そういう社会的雰囲気があったんです.

高橋: それは幼稚園に入る時ですか?

小平: はい. それでね, 僕は幼稚園に入る時にIQが少し高かったんだと思うんですけど, それで電車に乗って通う幼稚園に行ってたんですね.

高橋: 幼稚園に入る前にそんなテストをしたんですか.

小平: うん, 適齢期になると受けさせるのか, あるいは社会的に皆さんに知らせて子供に受けさせるみたいな, そういうのだったかもしれませんけどね.

高橋: それでレベルの高い幼稚園に行ったということですか. じゃあその幼稚園は, 結構勉強させるような?

小平: 清水幼稚園っていう幼稚園ですが, 勉強っていうほどではないと思うですよ (笑), 幼稚園だから. 勉強させられたとかそういう記憶は全くないです. 電車に乗って通ってたということだけ.

高橋: そこでどういうことをしたとかいうご記憶はありませんか?

小平: その時の記憶ってほとんどないですね. 担任の若い女性の先生が美人だったとか, 子供心になんかそういうようなら覚えくらいで.

高橋: 終戦は小学校に入ってからですよ.

小平: 僕は昭和12年生まれですから, 小学校に入ったのが6歳だとすると, 昭和18年ですよ.

高橋: じゃあ幼稚園の頃はまだそんなに大変な状況ではなかったですか?

小平: なんか大本営発表では, 日本は勝ち進んでるみたいなそういう状況でしたし, うちの叔父とか叔母なんかは満州鉄道の職員として満州へ行きましたしね.

●疎開先で終戦を迎える

小平: 僕は小学校の2年までは今の大阪教育大の附属に行ってたんです. その清水幼稚園から, あなたたち受けてみなさいみたいなことで試験を受けて, 全然その記憶はないんですけど, たぶんなんかうまく通ったんでしょうね.

高橋: 小学校で受験されたんですね. それはやっぱり親御さんが教育熱心だったということもあったんですかね?

小平: まあね, 母は高等学校に行く頃に母の家が破産したかなんかで, 自分が思うような教育を受

けられなかったものだから、子供はっていう気はあったのかもしれませんが、まあ全体としては、そういう社会的風潮の中で、きちんと育てないといけませんよ、みたいなことを言われたのがきっかけでそういうふうになったんだと思いますけどね。

高橋: そういう社会的風潮があったと。

小平: それで小学校にも電車に乗って通ってたんですけど、だんだん戦争がひどくなってきて、もう大阪市内に子供がいるのは危ないとかいう話になって、それで疎開しまして。

高橋: 疎開は学校単位で行くわけですか？

小平: いえ、それはもう個人個人で。ですから疎開した先は、高野山の麓の南河内郡っていう田舎に大日本セルロイドっていう会社の社員のための一画があって、そこへ行きました。まあ子供だったから全然そのへんの経緯は分かりませんが、なんか同じようなバラックがたくさん並んでる中の一軒に引っ越しました。そして親父が赤紙で兵隊に取られて、すぐ中国の北部へ行ってしまったんです。派遣されたっきりどこ行ってるか秘密で分からない。

高橋: ではご苦労されたんじゃないですか？

小平: 初めは母親とサツマイモを耕したり、なんか畑をやってたんですけど、やっぱり食べるものがないから、サツマイモだと実がなる頃までにはもうみんな掘っちゃってあって、サツマイモのつるを食べてました。カボチャもそうでしたね。

それでうちが疎開してたところの近くに高射砲陣地があってですね、結構アメリカの艦載機が太平洋の沿岸からやって来て、もう学校に行くときすぐ警戒警報発令とかでうちへ帰るんです。あぜ道なんか歩いてると、艦載機がワーツとやって来て、そのパイロットの顔が分かるくらい降りてきて、おおおってえらいんですよ。それで逃げ回って…。それはもう終戦、1945年の3月に東京大空襲がありましたけど、同じ頃に大阪もやられてですね、うちのあたりもひどかった。まずB29かなんかが高いところからやって来て油をまい

て、木造の家ですからね、焼夷弾を落とすとバーッと焼け野原になる。高射砲からサーチライトでB29を捉えるんだけど、撃ってる弾が届かないんですよ（笑）。そういうのを夜なんかに見ると、とてもきれいだったけれども、実際はやっぱり大変で。

高橋: 艦載機が来たっていうのは、疎開先に来たってことですか？

小平: 疎開先が、その高射砲陣地のそばだったんです。

高橋: 疎開って安全なところに行くわけではないんですか？

小平: そうそう。だから大阪市内に比べればずっと外で、疎開した集団のバラックがどうでしょうねえ、何百軒かずらっと並んでいて、周りは農家ですから、周りは全部農地です。そういうところだから普通に考えればそんな危なくないでしょうけどね。

それで農家さんに、お袋が我々の衣服を持って行って、サツマイモに変えてもらうとか、そういう物々交換をしていました。僕ら子供は行きしなに、お袋の着物やなんかをこう頭の上に乗せて、ワーツと走っていくわけ。そうすると村の子供が石を投げってくるわけですよ、「疎開もん」って意味でね。でもまあ農家の中にいくつかは心ある農家があって、都会から疎開してきた人のためにいい着物やなんかを物々交換してくれて、食料をもらったりしてましたけどね。

高橋: じゃあそういうところでもたまにB29が来たりして。

小平: まあ高射砲陣地がそこにあったってことがあるんでしょうけど、それでも大阪市内に比べればずっと安全なところだったんでしょうね。

高橋: そういうことがあって小学校にもなかなか行けなかったわけですね。

小平: まあ小学校なんかもだいたい教室は兵隊さんの宿屋でね。僕らは学校に行っても勉強するわけじゃなくて、兵隊さんのお手伝いをずうっと

やった。それでも終戦になるまでは、食料もね、何とかまづい乾燥芋だとか、そんなんでもまあとぎれとぎれでも配給があったんです。

高橋: 小学校では兵隊さんのお手伝いをして、授業どころではなかったわけですか。

小平: 専ら「鬼畜米英をやっつけろ」みたいな、竹槍を作ったりね。神社とかに集まってみんなでこう竹槍で藁人形を突つつく訓練とかやりました。

高橋: 授業の一環で、ということですか？

小平: そうそう。

高橋: やっぱり自分は兵隊になるんだって、そういう意識はありましたか？

小平: ああそれはねえ、2年生とかで絵日記っていうのを毎日書かされまして、上半分に絵を描いて、下に文章を書くんですけど、それを見るとやっぱり「早く大きくなって陸軍大将になりたい」とか、「お国のために役立ちたい」とかってことが書いてある。それは学校に見せるものだからってこともあるかもしれないけど、たぶん子供心に本当にそう思ったと思うんです。だって入ってくる情報がみんなそうですからね。歌もいろいろあって、「いざ来い、ニミッツ、マッカーサー」なんかかかるとかって、要するにアメリカの将軍をやっつけろっていう歌があってですね、それを普通に歌ってましたし。

ただやっぱり、隣組っていうのがありまして、通りずっとで20軒くらいでね、戦時中ですからいろいろ締め付けがきついわけです。それで反戦的な言辞を擁護する家庭があったりすると、すぐそういうところを通じて、隣組長からどこに行くのかなあ、なんか警察が取り締まりに来るような、そういう時代ですからね。うっかりした口がきけないっていうのは子供心に嫌でしたね。母親からも言われました、「気をつけなさい」ってね。

高橋: 教育勅語とかもあって？

小平: ああそれはもうねえ、天長節とかそういうのがあると校庭に集まって、それで御真影を置いてね、こうお辞儀をして、校長先生が教育勅語を

読むとかそういうのはもう普通で。2年生の頃なんかは、週に1時間くらいは体育の時間に軍人さんが来て、こうみんなちゃんと並んで歩くとか、敬礼とかね、右向け右とか、訓練させられてました。同じ運動場のはじの方には教育大の大学生が、やっぱりほぶくの練習とか銃を撃つ練習とかそういうのをやってましたからね。だからそれが普通の社会でしたね。8月15日も子供心にみんなでガーガーいう放送に集まって聞いた覚えがありますけどね。

高橋: それは小学校で？

小平: 小学校ではなくて、隣組ですね。

高橋: 近所の人が集まってですか？

小平: 近所です。今日はなんともかがあるから、みんなかしこまって。

高橋: 聞いて分かりましたか？

小平: うーん、なんか雑音が大きくて分からなかったですね(笑)。当時ですから天皇陛下の言葉も非常になんか難しい言葉だったんで、ただみんなの様子からしてだいたい大きなことだったんだろうと思いましたけど。まあ僕なんかそういう戦局がどうだっていう話よりはもう食べるものがなくて、ひもじくて、鼻ったらしておりましたから、そっちの方の関心の方が大きくて。

高橋: まあじゃあ一応そこで戦争が終わったというのは聞いたりしたわけですね。

小平: だから周りの人の雰囲気やっぱりだいぶ変わりましたよね。今までその隣組の中でも組長さんにみんなへいこらしてたのが、なんかしばらくしたらちょっと違う感じにはなりましたよね。

高橋: 解放されたような。

小平: そう、まあそうだね。そのかわり途端に配給がいい加減になるし、なんか闇市に行かないとだめだとかいうような、そういう時代になりました。終戦になってからの方が食糧難がひどくてですね、食べるものはないし、薪はないし、もうカエルだとか野草だとか、ずいぶんそういうのを食べました。捕りに行くとかラスメートと取り合い

になるわけですよ。そんなのがまあどうでしょう、1年くらい本当にひどかったですよ。

でもアメリカの占領軍が来てコントロールし始めてからは、少しはそのアメリカ経由の物資、干しリンゴだとか、が来るようになりました。毎日のように干しリンゴ、こんなリンゴのこう刻んだようなやつ、干した甘ったるいやつがね、三食配給されるわけです。まあそういう変なのだったけど、ともかく1年くらいしたらそういうふうになりましたけどね。終戦直後はひどかったですね。

それで父親は兵隊に取られててまだ戻ってこないですから、母なんかは大変だったと思いますね。

高橋: 終戦後もしばらくその疎開先にいたわけですか？

小平: だから父が帰ってこないとどうしようもないわけで、そこでただただ帰って来るのを待ちました。毎晩ラジオで「復員だより」というのがあるんですね。何々地方から何千人引き上げて来たっていう、それで名前を言うんです。だけどもまあそれだけじゃああれなんで、道で軍人さんらしき、要するに引揚者らしい人がいるとそれを捕まえて、「こういう人知りませんか？」っていう調子で口伝てに探したりしてたけど、結局何にも分からなくて。それである日、僕と叔母で道を歩いてたら、突然叔母が「あれ、向こうから来るのお父さんじゃない？」って言って、そしたらそうだったっていう調子です。

高橋: 帰ってらっしゃったんですね。終戦後どのくらいですか？

小平: 1年半くらいしてからだと思います。

高橋: 結構長いこと帰ってこなかったんですね。まあでもご無事で帰って来たという…。

小平: そうですね。

高橋: 特にケガとか、そういうのもなく？

小平: ええ、ケガしないで。父は後方部隊ではなくて割合戦線に近いところでやってたらしいんです。だけど帰って来てから、父は行ってた戦地の話って一切しなかったですね。子供にも家族に

も。やっぱり嫌だったんでしょうね。

●月は東に動く？

小平: それで父が帰って来たら、大日本セルロイドという会社は軍事産業に近いところですから、もう職がなくてですね、それでまあ職探しをやって。初めはその軍隊で知り合った人となんかやってたかもしれないんですけども、そのうちに従兄と一緒に東京で会社を始めるって言って、それで一家揃って東京へ引っ越して来たんですね。

高橋: 今度は東京に。

小平: その従兄が化学の素養があって、それでなんか当時は砂糖とかそういうのがなかったわけで、サッカリンとかあいう甘味料を化学的に作ることを思いついて、ちっちゃい化学の工場を始めたんですね。親父は事務系でしたから、その従兄と組んで親父が経営の方をやって、彼が技術的なことをやる。そういう会社を川崎の郊外に立ち上げて、それで移ったんです。で、移った当時はまだ会社も軌道に乗ってもしなかったんで、母の父親が立川に住んでたんですけどね、我々はそこにまあ寄宿するような格好で、6畳間に5人くらいで住んでましたね。子供ですから押し入れを2段にして下と上に2人ずつ、そういう調子でねえ。

高橋: それはまだ小学生の頃ですか？

小平: その時はまだ小学生です。だから何となく覚えているのは5年生の後期くらいだったと思いますね、その立川の高松小学校っていう小学校に入ったのは。

高橋: じゃあ立川に転校するわけですね。

小平: 立川は今ではもうものすごい都会になりましたけど、当時はまだ周辺はお百姓さんですね。だから高松小学校なんかでもお百姓さんの子と混ざってましたね。その時に初めてそのお百姓さんの家に遊びに行って、大きな梅の木だったかな、があってターザンごっこ称してその上に縄で住むところを作ってますね。学校が終わったらそこに行って木に登って青梅をかじりながら、ゲーム

やったりなんかして遊んでたんですね。それで夕方になると家に帰らないといけませんし、当時はだいたい電力が足りませんから、夕方に2時間くらい送電があるんですね。その時にみんな各家庭で蓄電池を用意しておいて充電して、小さな充電灯で明かりを点けて夕食をとったりして、でまあ暗くなったら寝るとい時代ですから。

で、ある時、暗くなって帰る時に月が明るいのが見えた。そのターザンごっこの小屋でまあ簡単な日誌をつけてたんですけど、その時にお月さまがどこに見えるかというのを書いてたんです。したら毎日同じ時間帯に見えますから、日ごとに月がだんだんだんだん東に行くんですね。それで学校に行って先生に「月は東に動くことが分かった」って言ったら、先生が、「本当かね、よく見てごらんない」とか言われて(笑)。それでその友達とまたしばらく毎日見てたら、やっぱり東に動いてくんです。

高橋: ああ、先生がおっしゃったのは一日のうちで月とか星は東から西に動いているということですよ。だけど毎日同じ時刻で見ると位置は東に移動して行く。

小平: それがたぶん天文にね、本当に興味を持った始まりだったんですね。それから後は立川から川崎に引っ越して、もうとにかく夜は真っ暗ですしね、テレビなんかもちろんない時代です。それでまあ月はともかく東に動いて、星はどっちに動かよく分かってない。夜暗くなると、星しか見るものがないんで、それがたぶん天文に興味を持った始まりです。

高橋: じゃあその頃星を眺めて天文に目覚めた。

小平: まあ当時ですから町は暗いし、星はきれいでしたよ、ええ。

高橋: 外で遊ぶというのが結構好きだったんですか？

小平: 普通はもう外ですね。もっと後になったらベーゴマとかそういうのがありましたけど、その頃

は何もないから、釘刺しっていうんですが、こんな五寸釘を、ヤッと地面に刺すわけね。地面は柔らかい土で。それでまあ数人でやるんですけど、敵の釘が立ってるところへピーンとやって敵の釘をすっ飛ばすと勝ちというふうになるわけですね。ですから五寸釘の立派なのを何本稼いだとか。

高橋: 釘を投げるってことですか？

小平: こうやって頭を持って、コツがあるんですけどね。うまく投げるとスパッと刺さるんです。それは結構やりましたね。それからメンコ、関西じゃベッタって言ってたけど。それから当時、野球が少し流行り出して、アメリカ軍が来てやりましたからね。だから僕もなんかグローブを買ってもらってやってた。上手にはならなかったですけど、グローブとバットくらいは家で買った気がするんです。

高橋: 東京に行った頃は、もう食料は良くなっていたんですか？

小平: 食料はねえ、まあ母の父親のところに下宿っていうか、6畳間に5人くらい住むの。それで母が9人兄弟ですから、うちの母の系統だけじゃなくて、兄弟の家族もその同じところにいた。なんかねえ、何屋だったのかよく分からないけど、下宿屋だったみたいなところに、3,4軒とにかくその兄弟の家族が住んでるようだったですね。

高橋: 大きなお家だったわけですね。

小平: ええ。そこでみんなで一緒に食事したりもしてましたから、その時はもうひもじいとかいうようなことはなかったですね。それでも、僕には事故で死んじゃった弟がいたんですが、その頃イワシが食べられるというのにもものすごく感激して、「大きくなったら魚になりたい」とかそういうこと言うくらいね(笑)。まあ急にイワシが食べられるようになった。それから覚えてるのは、キャベツの細かく刻んだ、とんかつについてくるようなキャベツを普通のご飯の上に乗せてお醤油をかけて食べるとかね。それが子供心にもものすごいおいしいものだった、そういう感じでしたよね。

高橋: じゃあその頃はだいぶましになって。

小平: まあ物資は出回って来てたんじゃないかと思えますね。

高橋: グローブを買ってもらったりとか、わりと経済的に余裕もあったんでしょうか。

小平: ええ、それはね、学校のほかの友達と比べると、多少そういう恵まれてるところはあったと思いますけど、まあそれは子供だから分かりませんでした。お百姓の子供さんもたくさんいましたからね、単純には比べられないですし、近くに栗林なんかがあって、農家の子なんかは栗とかが食べられたけど、僕らには栗はなかったですね。

高橋: その頃は勉強はもう普通の勉強になるわけですか。

小平: その頃は普通の勉強でしたね、もう。学校で普通に授業もありましたね。

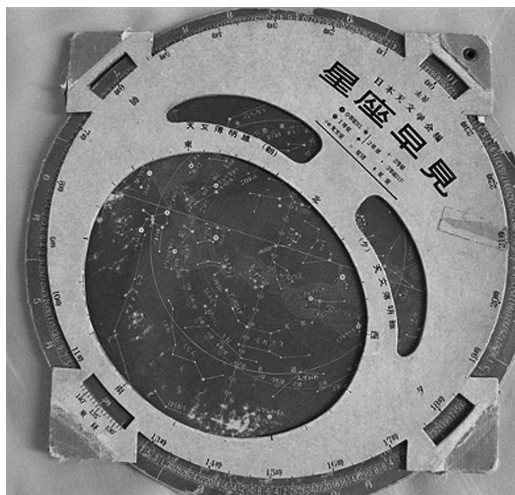
高橋: 勉強はお得意だったんですか？

小平: どうだろうなあ…。あんまり自分でそのう、得意とか何とかっていう記憶はないですね。そのお月さまを観察して先生と言い合ったとか何とかいうのを見ると、多少なんかこう自然を観察して理屈をこねるのは好きだったかもしれませんけどね。

高橋: 算数が好きとか理科が好きとかそういうのはないんですか？

小平: そういうのは記憶にないですねえ。でねえ、川崎市に引っ越したらば、そこはまだ二部授業っていうか、大きな講堂みたいな体育館の中をこう仕切ってやって、午前部の部と午後部の部とかがありました。たぶん校舎が足りなかったんでしょうね。そういうので、勉強のことはほとんど覚えてないですね。遊ぶのはけん玉だとか、それから馬飛び。一度、階段のところで馬飛びの馬を作って、潰れちゃって足を折っちゃって、ひと月くらい骨接ぎに入院してたことがありますけど、そういう遊んだことはいろいろ覚えます。

●東京天文台と流星観測



中学から愛用の星座早見(日本天文学会編・昭和26年発行)。(小平氏より提供)

小平: 勉強はですね、1つだけ天文と関係あるのは、その頃進駐軍っていうか米軍の教育政策の1つで、要するに子供たちに今までのタガをはめた教育じゃなくて、自分たちの自由なことをやらせるっていう時間が週に1時間か2時間あったんです。高等教育も含めてアメリカの影響を受けて急速に移り変わっていった時代なわけですよ。でまあ5,6人の気の合ったグループで何をやってもいいと。

その時に、どういうわけでそんなものを持っていたのか、親父か母が買ってくれたのか、ギリシャ星図っていうかギリシャ神話の書いてある星図(野尻抱影著『全天星座図志』)があったんです。その絵が面白くて、星が面白いっていうよりもギリシャ神話のオリオンのこん棒持ってるやつみたいな、ああいうのが面白くて、自由時間にその書き写しをやってたんですよ。星をこう並べて白鳥とかね。そうしたら担任の先生がそれを見てたんでしょうね。6年生の時に、川崎市の教育委員会でもって小中学校の教員研修の一環で、三鷹の天文台見学っていうのがあったんですね。あった

どうか後から僕は知ったんだけど。

高橋: 天文台というのは当時は東京天文台ですね？

小平: はい、それでうちの小学校にはそれに行く理科の先生が特にいないと。そしたら当時の僕の担任の先生が、「子供なら1人いる」って。まあ今から考えたらずいぶん自由っていうか、まあ戦後のね、そういう非常に自由な空気の中だったんでしょうけど、「うちは理科の先生は行かないけれど、6年生を1人行かせる」って行かせてくれたんです。

高橋: へえ、小学生の頃に東京天文台に行ったんですか。

小平: ですから川崎市の理科の先生と一緒に三鷹に行って、そしたらまあ子供が1人来てるというんです、「川崎坊や」って呼ばれて、天文台のもう亡くなられた下保（茂）さんとか富田（弘一郎）さんとかが、かわいがってくれたんです。

それからその時の研修をオーガナイズした箕輪敏行っていう先生、この先生も亡くなられましたけど、西生田小学校の理科の先生がいらっしゃったんです。東京天文台は大正時代に麻布から三鷹に引っ越したわけですけど、当時三鷹もだいぶもう周りに家が建て込んで明るくなってきてたんですね。それで西生田って今のみうりランドの先の東京の郊外なんですけど、富田さんなんかその小学校の校庭を借りて流星観測儀を据えて流星観測をやってたんです。そこと木更津かなんかで2点観測をやってたんですけどね。で、その時のご縁で、「じゃあ一度手伝いに来るか」っていうんで、僕はそれにくっついて行ったことがあったんです。

高橋: 富田さんの流星観測の手伝いにはですか？

小平: はい。それでその箕輪先生のうちは大きな農家だったんですけど、その農家に泊めてもらって、夜は富田さんと一緒に校庭で夜明かしして流星儀で写真を撮りました。

高橋: 流星観測っていうのはどうやってやるんですか？

小平: 流星観測はですね、流星儀っていう四面カメラ、4つ箱状のカメラが1つの赤道儀に載っていて、4つともちょっと視野が違ってのわけですよ。それで空を追っかけていく。ペルセウス流星群だったらだいたいの辺に出るっていうのがあるわけですから、ずうっと追っかける。でもって何時間か露出して乾板を取り換えるんですけど、星座っていうか星が写ってる中に流星がこう流れるわけ。で、その四面カメラの前にプロペラがまわっていて、シャッターがまわっててですね、流星がちょんちょんちょんちょんこう切れて写るわけです。そうするとまあ何秒明かかったかっていうのは出るわけですね。ところが時刻が記録されないんで、それが隣に座っている僕の係で、クロムメーターってありますよね。モルス信号の発信機みたいなもので、テープがこう流れていてそこへ時刻が入ってるんですね。で、これをちゃんと押すとテープにピクッと出る。それで流星儀がまわってて、僕の役割は流星が流れるごとに「出ました」って言ってそれをちゃんと押すわけ。そうするとそれが何時何分のやつって分かるわけですね。それででもってその時に富田さんはたぶんその流星の位置みたいなものをどこかに記録するんだと思うんですけど、そうすると写真に撮ってあるそれと、木更津あたりで別に観測をやってるのを合わせて高さが出る。三角測量で高さが出るわけです。そうするとまあその高さでこれだけ飛んだから、速度がどれくらいでっていうのが出て、それから明るさを測るとかね。

高橋: なるほど、それで2点で測ってるわけですね。小平先生は時刻を見る係だったと。

小平: まあ今はねえ、はやぶさがいてイトカワに行行って帰って来るけれども（笑）、当時としてはとにかくその地球外天体の中では、隕石と流星っていうのが重要な観測対象だったわけで、その流星の燃え尽き方とか、色でもって元の砂粒がカーボン質か鉄かとかそういうのがある程度判断が付くわけ。まあそういうことを大先生たちはやって

おられたと思うんですよ。僕はただ「出ました」って押すのでしたけどね(笑)。

高橋: でもすごいですよね。本格的な研究のお手伝いをしたわけですよね。

小平: それで観測の次の日にそこから電車で三鷹へ戻って来るんですが、当時はまだ外食券食堂でしょ。配給の券がないとご飯が食べられない。それでその三鷹の駅前の外食券食堂で富田さんの外食券で1人前とって、2人で半分ずつ食べたんです。それで三鷹の天文台まで戻ってきたんですが、三鷹の構内はほとんど芋畑だったんですね。それでその芋を掘って飯盒でふかしてお腹を満たしてっていう、そんなことをしていました。現像したり測ったりっていうのはだいぶ後になってから手ほどきを受けましたけど。だから当時はまあついて行くこともかくなんか徹夜でやって、次の日にご飯が食べられるという、それでついて行ったようなものでしたけどね。

高橋: 子供の頃にそんな体験をしたっていうのは貴重ですよ。本物の天文学者と知り合いになれたっていうのも。

小平: だから今考えてみると、富田弘一郎さんとかがいた部門の長ってのは広瀬秀雄さんだったんです。広瀬さんなんかは本当の学者なわけですよ。で、まあ下保茂さんとか富田弘一郎さんとかは観測技術には長けてるけど、いわゆる技官っていうんでしょうかね、技術系の職員っていう位置づけで、そこは当時は非常に厳然とした違いがあったんじゃないでしょうかね。お医者さんと看護師さんみたいな。

高橋: 流星観測は広瀬さんに指示されてしていたということなんですかね？

小平: どうなんですかねえ。広瀬秀雄先生って天体力学の系統の方で、天文台の中で天体搜索部ってのがあったんですね。広瀬さんはその部長さんで教授だった。その下が古在(由秀)さんあたりですから、僕がそうやって行った頃には古在さんはまだ助手だったか院生さんだったか、

そういう時代じゃないでしょうか。例えば僕が中学生で13か14だとすると、古在さんが24とかね、10年くらい上ですから。だからまあ大学院生だったかそれくらいだと思うんですけどね。そうするとだから広瀬先生が教授で、その下にやっぱり力学をやっていた方が少しおられたかもしれませんが、あとは若い古在さんのような方がいて、まあ技官レベルのそういう実務をやっている人たちがいた。

高橋: その時は古在さんとは会ってないんですか？

小平: お会いしてません。三鷹に行った時に、広瀬先生なんかにはみんながご挨拶に行くんで一緒に行ってお会いしましたが、なんか偉そうな怖そうな先生でしたね(笑)。で、だいたい天体搜索部っていうところは、天体を探して観測して位置を決めたりしたのから、太陽系の運動を通して暦を計算したりするんで、その計算をする女子職員みたいのがたくさんいましたね。暦計算室って古在さんの話にもたぶん出てきたと思うんですけど。だから当時の天文台ってのは、暦の編纂とかそれから天文台の片隅に報時室ってのがあって、時刻もやってたんですよ。ですからそういうのが主な業務で、僕が後に助手で東京天文台に入った頃に古在先生とお話しするようになって、古在さんがよく「いやあ君たちはいいね。天文台で研究みたいなことができ、僕の時には研究は家でやれ、天文台では仕事しろって言われてたんだよ。」とかってよく言われてましたけど。だからなんかその頃天文台は現業事業所っていう感じでしたね。

高橋: もともと小中学校の教員のための研修を三鷹でやってたということなんですよ。天文台はそういうふうに開放されていたわけですか。

小平: それがですね、教員研修を常時やってるわけじゃなくて、川崎市の教育委員会が理科教育関係者の研修行事を組んだ時に、たまたまその箕輪先生っていう富田さんと一緒に流星観測をやった先生が担当だったので、たくさんある理科のプ

ログラムの中で天文台見学っていう行事をやったんですね。

高橋: じゃあ天文台を見学して回ったわけですか。こういう望遠鏡があるとか。

小平: うーん、それは全然僕覚えてない(笑)。そういう難しいことは、子供だからただついて行って、あそこの26インチ望遠鏡とかって見せてもらえたかどうか覚えてないですね。なんとなく匂い官舎とか建物なんかがあって、研究室の中も湿っぽい感じの薄暗いところだったくらいで。

高橋: 小学校の高学年の間ですか、そういうことをされていたのは。

小平: 小学校から中学の初めくらいまでですね。そのうちに富田さんや箕輪先生が川崎天文同好会っていうのをほかの同志と起こされて、その時に子供メンバーっていうかサブメンバーに入れてもらってですね。で、僕はちょっとしたカメラを親父に買ってもらって持ってたんで、固定式で撮って、何が写ってたのかなあ…。ペガサスの四辺形を撮ったらその写真をね、川崎天文同好会の会誌の第1号の表紙に貼ってくれたんです。

それからまあいろんな人が面倒みてくれて、中学1年になった頃に僕が「望遠鏡欲しい欲しい」って言ったら、富田さんが「それじゃあ手製で作ってみませんか」って言われてですね。それでまあレンズが問題だったんですけど、今のニコン、日本光学が軍事用の潜望鏡のレンズで結構明るい視野のレンズが2つ残ってるっていうんですね。戦争用に作ったやつが。で、富田さんが縁をたどって、2つ残ってるうちの1つを仕入れてくださって、2枚玉の色消しなんですけどね、8cmの口径です。それでレンズは手に入ったんです。あとはしょうがない、町工場で鉄管を細工して鏡筒代わりにして、それから当時のことですから駆動系なんてのは全く作れなくて、木製の三脚に重い鉄製の経緯台を載せて専ら手で追いかけるんです(写真参照)。それでまあ中学にいる間なん



中学1年生の頃、自家製望遠鏡(経緯台式8cm屈折)と(小平氏より提供)。

かは昼間に黒点の観測とかですね、夜は月面とかオリオン星雲とか土星とかね、そういうのはきれいに見える。黒点のスケッチはだいぶ続けてましたよね。それが縁で、アマチュア天文少年というかね、そういうところへ進んだんでしょうね。

高橋: それも結構本格的な天文体験ですよ。

小平: でまあその頃から人が「大きくなったら何になりたい？」って聞くと、子供だからなんか答えなくちゃいけないので、「天文学者になりたい」とかって言っていましたけど、富田さんについて三鷹へ行ってみると三鷹の敷地の芋畑の中に官舎があったんですね、職員の官舎がたくさん。交通もまだ不便な時代でしたし、見てみるとやっぱりなんかみすばらしい住まいで、質素な暮らしを皆さんされてね。まあ天文学者ってのはやっぱり半分坊さんみたいな感じのものなのかなっていうのが印象だったから、大きくなったら何になりたいかっていうのに天文学者ってあんまり威張って言える感じでもなかったですけどね。好きだから天文やりたいくらいのことで、そんなこと言い出し

たら親父が弟たちに、「あれはね、将来食っていけないから、お前ら頑張って助けてやれ」とかなんか家でも言われたね（笑）。

●天文学者になるなら東大に行け

高橋: 中学はやっぱり川崎の中学に通われたということですか？

小平: 中学はね、僕は青山学院中等部ってところに行ったんですよ。それはやっぱり母がたぶん少し勉強させようと思って、入学試験がありますからね。だけど今みたいに塾なんてないわけですしね、多少は勉強したかもしれませんが、どういふ試験があったのかもあんまり思い出せません。アチーブメントテストっていうのは中学を出る頃じゃないかな。入学試験の記憶はないですね、あんまり。

高橋: じゃあお母様が受けてみなさいと。

小平: まあその青学中等部を受けなさいっていうことでなんか受けたんですよ。その頃、僕らが学生の頃に教育制度の改革があって、僕らはその3年目に当たっててですね。中学も3年、高校も3年ですから、いつも入学する時に第1期っていうかね、前の制度の人が卒業するっていうそういうサイクルで、新制の制度、新制の学生という位置づけでした。で、青山学院中等部っていうのはもともと女子中だったんですよ、女子だけだったんです。僕は3期で入りましたが、やっぱりクラスでよくできた子っていうのはみんな女の子でしたね。

高橋: 場所はどちらなんですか？

小平: 場所はね、渋谷です。渋谷に青山学院大学がありますけど、その少し外れの裏の方にあったんですね。

高橋: それは川崎から通うってことですか？

小平: その時はねえ、川崎っていても慶應の日吉があるところで東横線の沿線でしたから、渋谷へ出ればもうそこから歩いて行かれたんです。だから通うのにそんなに苦労はなかったですね。当

時は時々ストライキがあってですね、私鉄やなんかも全部ストライキで止まると、渋谷まで歩いていったりしましたけど。ですから中学に通学していた頃は、その8cmの望遠鏡が使えて、中学にも持って行って置いておいて、昼休みに黒点観測なんか、好きなやつ2,3人で一緒にしたりしてましたよね。その頃はどうでしょう、理科っていうか数物系は一応好きっていうか得意だったってことはありますね。

高橋: 中学に望遠鏡を持ちこんで黒点観測をしたわけですね。

小平: それでね、中学2年くらいかな、父のつてか仕事のつてかなんか知りませんが、山本さんっていうペルーに移住して戻って来た人がいてですね。山本食い飲み助って、本当は邦之助っていうんですけど、大食だったんで食い飲み助っていう大人（たいじん）の風格があるおじさんがいて、どういう縁か知らないけど、父に連れられてその人のところへ行ったんです。そうしたら「ペルーは星空がきれいだ」って話をされてですね。「是非天文学者になりなさい」って言って、「自分の知ってる人に有名な天文学者がいるから、どうしたら天文学者になれるか聞いてみたらどうだ」って言うわけですよ。それがね、今から思うととんでもない、京都大学（注：旧京都帝大）の山本一清……。

高橋: 山本一清さんですか？

小平: 山本一清さんに手紙を書けていうわけ。山本って姓が同じだからなんか遠縁だったのかもしれないです。それで「天文学者になりたい」って書いたら山本一清さんから葉書が来てですね、「天文学者になりたいっていうのは結構な話だ。今、東北大学と東京大学と京都大学と3つ天文学ができるところがあるけど、あなたは東京にいるから天文学者になりたいなら東大に行きなさい」って簡単に書いてありました（笑）。ふーん、そういうもんかと思って。

高橋: すごいですね。山本一清さんから返事が来

るって。

小平: それから、僕は川崎天文同好会に所属してたんですけど、東京には日本天文研究会っていうのがあって、神田茂さんとか科学博物館の村山定男さんとかっていう方々がコアになっていました。それはねえ、亡くなられた森本雅樹さんがそっちで活躍してたらしいんですよ。僕は東京の日本天文研究会のことを知ってて、さっき話した箕輪先生に連れられて、時々村山定男さんのところにも行っててですね。それでそのペルーにいた山本さんがペルーから持って来たっていう岩石があったんです。箕輪先生がそれを見るとどうも隕石らしいって。隕石って擦るとなんか模様が出てくるんですよ。特有のウイドマンシュテッテン構造が見えるみたいだから、科学博物館に持って行こうって村山先生のところへ持って行って。そしたら「鑑定には時間がかかるから」とかって預かったっきり、どうどう戻ってこなかったことがあった(笑)。科学博物館も子供の頃何度か行ってましたね。

高橋: 森本さんには当時会ってるんですか？

小平: 会ってないですね。森本さんも結構なアマチュアだったと聞いてますけどね。

高橋: そうですか。先程の話で、天文学者になるには東大に行け、ということでしたね。それで東大を目指したんですか？

小平: そうなんですけど、親戚の人だとか青学の先生が、「東大に行くんじゃ青山学院にいてもだめだ」って言うわけですよ。当時は公立の高校の方がまあ進学率は良かったんですよ。「公立の高校へ行きなさい」って。じゃあどこの高校に行けばいいって、そしたらたぶん青山学院の数学の先生だと思いますけどね、「東大に行きたいんだったらこの辺で一番いいのは日比谷高校だ」っていうわけですよ。「ともかくそこを受けてごらん」とかって言われたんですけど、僕はそのための受験勉強をあまりしなかったんです。ただ、日比谷高校は都立だから都内に住んでないといけな

というんで、東京都内の親戚のところへ籍だけ移して受験して、運良く入れたんです。どういうわけだか入れたんですよ。

高橋: あんまり勉強しなくても。

小平: 青学にいる間、あそこはミッションスクールですし、ちゃんと髪を伸ばして背広が校服になってたりするんですけどね、日比谷では頭は丸坊主にして(笑)。それでまあ日比谷に入ったら結構面白い学校ですね、始業式に行って戻って来て教室に座ったら、隣の席に瀧谷っていう灘中の出身のやつがいてですね。「お前、この学校に来て大きくなったら何になるつもりなんや」って言うから、「まあ天文学者になろうと思ってるんだ」って言ったら、そいつが「なんだ、今からそんなことが分かってるようじゃ、お前、大したもんにはなれんで」なんて言うんで、こりゃ大変なところへ来たって思ったんです。そいつは本当に面白いやつでですね、詰碁が好きなんですよ。「白黒互いに打ち合って地を取り合うっていうだけのルールで囲碁くらい面白いゲームはない」っていうわけです。それでももう紙さえ見るとひっくり返して碁線を引いて、「これ詰めてみる」ってわけですよ。僕はそいつに取り憑かれちゃって、ずうっとそういう調子でいたんです。それでね、そいつは高校2年の時に「日本は狭い」って言ってね、東大の哲学にいた兄さんと一緒にブラジルに移民で行っちゃったんです。

高橋: ええ～。

小平: それで焼畑農業をやったんだけどやっぱりうまくいかなくて、それでなんかサンパウロの貧民窟にいるとかいう噂を聞いてたんです。けどみんなが60歳になった時のクラス会にひょっこり出てきて、なんかブラジルからエビを輸出する企業の社長になっちゃって(笑)。

高橋: 成功したんですね。

小平: それとか、国語の時間に先生が「君たち、無人島にこれから流されるとして、3冊本を持って行くとしたらどういうのを持って行くか」って

言ったら、みんなやっぱり高校1,2年だからね、みんなロマン・ロランの『魅せられたる魂』だとか聖書だとかね、いろいろと言った。彼はね、白水社の『家の建て方』と、『葉草の見分け方』とあって非常に現実的なのを言って面白い人だったんだけど(笑)。まあそういうのが結構いる学校でね。

僕はガリ勉じゃなくて趣味がたくさんあってですね、僕は日比谷高校に3年間いる間に水泳をやったんです、日本泳法っていう古式泳法を。ふんどし締めて何里も泳ぐような。それと冬はスキーのクラブに入ってやってまして。

高橋:運動はお好きなんですか?

小平:運動っていってもたぶんねえ、チームプレーや競技スポーツではなかなか運動神経が十分じゃないと思うんです。水泳だとかスキーだとかって、まあ1人だけでできるような、まあ自然の中でのスポーツが好きだったんでしょうね。だから卒業して大学に行ってから学校行事のスキーのコーチをやったり、水泳でも夏になると師範部屋っていうのがあってですね、そこへ詰めてひと夏中水泳を教えたりしてました。だから学生時代って勉強の思い出っていうよりはそういうスポーツをずっとやってたから、そっちの方が多かったですね。

高橋:本を読んだりはしなかったですか?

小平:本はねえ、中学時代まではあんまり…。ファールブルの昆虫記だとかは覚えてますけど、本が好きっていう方でもなかったですね。だけど高校生の頃、当時は戦後でまあそういう文化的な知識欲が国民の中に出てきた頃で全集物が出てきた。世界哲学全集だとかね、日本文学全集とかそういう全集物が出た。それで月極めでお金を払うとくとそういうのが毎月来るっていうのがあって家で揃えてくれたんで、高校生くらいからはそういうのかじり読みをしました。

高橋:山本一清さんなんか、一般向けの本を書い

ておられますよね。そういう本を読んだりは?

小平:天文の本はですねえ…、なんか僕が覚えているのは、山本一清さんが書いたのかなあ、相対性理論とか宇宙論のなんかがあってですね、難しいんだけどなんかこう大学生くらいの時ってそういう知的な見栄みたいなのってあるでしょう。なんかそういうのを、「いやあ、自分も宇宙論の本を読んでるんだ」みたいな(笑)。そういうことで、恒星社の天文講座のシリーズになってるやつの終わりの方にそういう宇宙論みたいなのがあって、それは電車の中で毎朝少しずつ読んでた覚えはありますけど、それはまあ大学生になってからですね。

(第2回に続く)

謝辞:本活動は天文学振興財団からの助成を受けています。

A Long Interview with Prof. Keiichi Kodaira [1]

Keitaro TAKAHASHI

Faculty of Advanced Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami, Chuoku,
Kumamoto, Kumamoto 860-8555, Japan

Abstract: This is the first article of the series of a long interview with Prof. Keiichi Kodaira. Prof. Kodaira has made great achievements in stellar and galactic astrophysics, and especially pioneered research on galaxy structure based on quantitative classification of galaxy shapes. He also led the community from the early stage of the large optical infrared telescope project (Subaru Telescope) and promoted the construction as the Director of the National Astronomical Observatory of Japan, making a significant contribution to the development of Japanese astronomy. In this article, he talks on his childhood and school days, when he encountered astronomy in the difficult social situation during and after the war and aspired to become an astronomer.